

シンジルト編『目で見える牧畜世界  
——21世紀の地球で共生を探る——』  
東京：風響社、2022年、161頁

坂井 弘紀

中央アジアの歴史と文化を考えるうえで、遊牧民の生活様式・文化形態の理解は不可欠である。だが、遊牧／牧畜を、そうしたローカルな枠組みを超えて、一つの文明論としてとらえようというのが本書の試みである。本書は、牧畜を生業・知恵・現在・未来といった多角的な視点でとらえ、12名の歴史学者と人類学者によって、それぞれのフィールドでこれまで具体的に得てきた知見やデータが提示される。いずれの論考も、かけがえのないフィールドワークの成果だ。遊牧・移牧・定牧といったさまざまな形態を「牧畜」という用語でまとめて、世界各地に展開する家畜をもとにした生業を営む人々の文化のあり方を示す方法は画期的である。中央アジア関連では、1「ユーラシアの心臓部、天山の山嶺から—— 牧畜民の来し方、いま、そして行く末は——」(クルグズ(キルギス))、2「ウマを愛でる歴史——ソ連・ロシアの経験は牧畜をどう変えたのか——」(カルムイク)、4「カザフスタン・小アラル海地域での牧畜—— 牧畜が災害復興に果たした役割とは何か——」(カザフ)、コラム2「モンゴルの乳しぼり—— 牧畜民と家畜の心は通うか——」、10「オイラト、動植物、無生物—— 牧畜民的な「共生」とは——」の論考があり、これらは本書全体の半分近くを占める。そのほか、チベット高原やブータン、インド、ケニア、エチオピア、トルコ、ギリシア、ブルガリア、ハンガリー、ペルーなどユーラシア大陸のみならず、アフリカ大陸や南アメリカ大陸も視野に入れ、世界各地の「牧畜文化」を網羅している。

現在、広く議論されている「共生」というテーマが本書全体に流れており、「牧畜世界」に存在する「共生」のメカニズムを可視化することが本書の目的となっている。編者が述べるように、遊牧民が「近代社会を生きる我々にいい影響を与えるヒントを持って」おり、遊牧に「西洋近代文明が直面する課題の解決策を見出すことができる」とすれば(1頁)、われわれがそこから学ぶべきものは多いはずである。

総説では、牧畜とは何かという問題を、先行研究にもとづいて整理されており、本論につながる、わかりやすい導入となっている。また、特筆すべきは、本書がオールカラーであり、数多くの貴重な写真が掲載されている点である。これらを眺めるだけでも興味深い。資料編

の基本語彙解説や関連年表も有益で、「牧畜世界」に馴染みの薄い読者にも理解しやすいであろう。

本書は科研「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」の研究成果の一部であり、紹介者(坂井)もその研究会にお声をかけていただいたが、大胆な構想で活発な議論がなされる、刺激的な研究会であったことを思い出す。同じくその成果である『牧畜を人文学する』(シンジルト・地田徹朗編著、名古屋外国語大学出版会、2021年)を本書と合わせて読むとさらに理解が深まることであろう。

(和光大学表現学部)